

平成 21 年 3 月 20 日

九州大学大学院経済学研究院

産業マネジメント専攻長 星野裕志 殿

出張等報告（記録）書

報告者

ICABE 学生交流推進プロジェクト

教員代表

経済学研究院 教授 村 藤 功

同 准教授 朱 穎

同 特任教授 丹羽由一

学生代表

産業マネジメント専攻 1 年 岡本洋幸

同 小林亜希子

同 鄭自力

大学改革推進等補助金による出張を下記のとおり行ないましたので、報告いたします。

記

1. 費用の負担

平成 20 年度大学改革推進等補助金

2. プログラム名称

ICABE 学生交流推進プロジェクト（第 10 回）

3. 用務地

香港、深圳

4. 用務先

香港大学、香港科学技術大学、JETRO 香港、新光証券香港、香港貿易發展局、東莞友池有限公司

5. 用務地の概要と事業の関連について

< 用務の概要 >

学生間討論会、香港経済関係者との交流、東莞友池有限公司現場視察

< 事業の関連 >

ICABE に基づく学生間交流、香港、中国経済関係者との交流を通して、現地の最新事情把握によるアジア市場に対する理解の深め、提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を図る。

6. 出張日程

平成 21 年 2 月 26 日（木）～平成 21 年 3 月 1 日（日）

7. 参加者 合計 27 名

< 教員 > 計 3 名

村藤功 教授、朱穎 准教授、丹羽由一特任教授

< 産業マネジメント専攻 1 年 > 計 14 名

岡本洋幸、小林亜希子、鄭自力（以上学生リーダー）

池田泉、磯貝健哉、出田貴宏、井上透、浦上早苗、清原茂森、宣虎長、寺崎一生、
浜崎孝宏、三浦智穂、米川真

< 産業マネジメント専攻 2 年 > 計 8 名

江上直人、小栗康生、加藤雅子、鎌田幸治、齊珂、高橋利幸、高木恭一、松尾光展

< 修士課程 1 年 > 計 2 名

香月佑太、橋本容典

以 上

ICABE 学生交流プロジェクト

目的：International Consortium of Asian Business Education (ICABE) に基づく学生交流事業の一環として、香港の最新事情把握によるアジア市場に対する理解の深化と、提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を目指す。

日程：

平成 21 年 2 月 26 日 (木)

- 08：25 福岡空港国際ターミナル集合
- 10：25 CX511 便 (台北経由香港行き) 福岡発
- 14：55 香港着。貸切バスにて香港市内ホテルへ移動
- 16：30 ホテル到着。チェックイン
- 17：30 JETRO 香港事務所 到着

【JETRO 香港事務所訪問】

- ・香港経済の動向、日系企業の動向について

- 18：30 JETRO 香港より夕食会場へ移動
- 19：00 夕食 (その後ホテルへ)

...活動報告

平成 21 年 2 月 27 日 (金)

- 09：00 ホテルロビー集合、移動

< 香港大学交換セッションチーム (引率：村藤教授、朱准教授) >

メンバー：岡本、小林、鄭、磯貝、井上、宣、寺崎、加藤、松尾

- 10：00 香港大学 到着

【香港大学ビジネススクールとの交流セッション】

- ・国際金融センター香港 (QBS)
- ・グレート香港にむけて (QBS)
- ・香港のテーマパーク産業について (QBS)
- ・香港における日系企業のビジネス戦略 (香港大)
- ・中国経済と日中の貿易 (香港大) など

...活動報告 ~

< 香港貿易発展局 (HKTDC) チーム (引率：丹羽特任教授) >

メンバー：池田、出田、浦上、清原、浜崎、三浦、米川、江上、小栗、鎌田、斉、高木、高橋、香月、橋本

- 10：00 HKTDC 到着

【HKTDC 訪問】

- ・概要説明、意見交換

- 12：00 昼食

...活動報告

- 15:00 新光証券香港 到着（各チーム合流）
【新光証券香港 訪問】 ...活動報告
・概要説明、意見交換
16:30 新光証券香港よりホテルへ。その後、夕食会場へ移動
18:00 夕食（その後自由行動）

平成 21 年 2 月 28 日（土）

- < 香港科学技術大学訪問チーム（引率：村藤教授、朱准教授） >
メンバー：岡本、小林、浦上、清原、三浦、加藤、高橋、池田、宣
10:30 ホテルロビー集合、移動
12:00 中国科技大到着
【香港科学技術大学訪問】 ...活動報告
17:00 ホテル着

- < 深圳・東莞訪問チーム（引率：丹羽特任教授） >
メンバー：鄭、出田、寺崎、浜崎、米川、江上、小栗、鎌田、高木、斉、橋本、松尾、井上、香月、磯貝
09:00 ホテルロビー集合、バスにて移動
10:30 中国広東省深圳市 到着
・市内散策、昼食、移動
14:00 東莞友池有限公司 到着（中国広東省東莞市）
【東莞友池有限公司訪問】 ...活動報告
・概要説明、工場視察、意見交換
16:20 東莞市から深圳市へバスにて移動
17:30 懇親会
20:10 深圳市より香港へ移動
21:50 ホテル着

平成 21 年 3 月 1 日（日）

- 12:15 ホテルロビー集合、貸切バスにて香港空港へ移動
15:15 CX510 便（台北経由福岡行き）香港発
20:55 福岡空港着、解散

以 上

【活動報告】JETRO香港
香港経済の動向、日系企業の動向について

説明者：JETRO香港

記録者：5期生 小栗康生

1. 香港の概要と機能

- ✓ 面積は東京都のおよそ半分、人口は約700万人と、人口密度が高い地域である。
- ✓ 1997年に英国から中国へ返還されたが、英国の法制度を有したままであり、2047年までは一国二制度による統治がなされることとなっている。
- ✓ 香港は、関税がなく所得税率も低いこと、地理的な有利さ、高い英語の通用度、企業進出にあたり規制が少ないこと等から、国際金融拠点、国際物流・貿易の拠点として発展してきた。特に輸出のうち96%は再輸出であり、その半分以上が中国向けという、中国貿易のハブとして重要な役割を果たしている。また弁護士、会計士などの国際サービス拠点としても重要である。

2. 香港経済について

- ✓ 中国返還後の香港は、アジア金融危機や米国ITバブルの崩壊、サースの流行といった時期を除けば、高い経済成長を実現してきた。
- ✓ C E P A設立、無関税品目の拡大や中国本土からの旅行解禁といった中国政府の香港優遇政策により高い成長を維持しており、香港経済は比較的中国への依存度が高い。これは、香港の中国返還を成功させたいという中国側の思惑もあると思われる。
- ✓ 金融危機後は、消費は春節など時期的な要因もあり比較的堅調に推移してきたが、製造業の低迷などの影響もあり、今後は落ち込みが懸念されている。ただし日本のような消費マインドにおける悲壮感はない。
- ✓ 2007年には、約2800万人の旅行者が香港を訪れており、うち55%は中国からの旅行者である。大陸からの旅行者が香港経済を下支えしているという面もある。
- ✓ 株式市場については、金融危機後ピーク時のほぼ半分の水準にまで落ち込んでいる。

3. 日本との関係について

- ✓ 香港の、日本との貿易総額は4069億香港ドルで、中国、米国に次ぎ3位(2007年)。
- ✓ また、日本の農水産物の輸出先としては、香港は世界で第1位の市場となっている(2008年実績で795億円、シェア18%)。特に食品輸出においては、九州は先駆者的な位置づけにある。
- ✓ 日本から香港への直接投資残高は、608億香港ドルで5番目(2006年)。最近では香港人をターゲットに進出した日本のスーパーや外食チェーンが代表例としてあげられる。その中でもジャスコは、ターゲットを香港の中所得者層に絞り、現地人に受け入れられる品揃えで店舗展開を進めている。

以上

【活動報告】 Hong Kong as an international financial centre.

説明者 5期生 松尾 加藤、6期生 岡本

記録者 5期生 加藤雅子

概要：国際金融センターとしての香港の過去・現在を踏まえ、今後も国際金融センターとしての地位を維持し続けるためにいかにあるべきかを提案した。

国際金融センターとしての香港の近況（現在）

世界の GDP の推移を見ると、昨年末からのサブプライムの影響により現在下降気味ではあり、今後も厳しい状況が予想される。国際金融センターには、5つの要素があると言われている。1. 優秀な人材 2. 良いビジネス環境 3. 市場アクセスが優れている：証券化ビジネスの水準や株式・債券取引量が高い市場。4. インフラが整備している 5. 生活の場として優れている。香港がこれらの要素を満たして成長してきたのかを確認したい。国内株式市場取引額は世界第7位、株式時価総額も世界7位の位置にあるが、債権市場は、他のアジアの地域と比較して小さく、国際金融センターとして多様な金融商品がそろっていることも条件として挙げられる中、弱点と言われている。また、国際取引における、取引通貨としての香港ドルの比率は、年々上昇傾向にある。

国際金融センターとしての香港の発達の経緯（過去）

香港は、金融センターとしての5つの要素を持っており、それらの要素は、イギリスの領地であった頃の遺産もあり、貿易や金融機能の集中による競争優位がある。また、言語や文化においても優位性を持っており、さらにビジネス環境や税制についても整っている。中国に返還されたが、ドルペッグしていることによる通貨の安定性もあり、国際社会からの信頼を勝ち得ていることが強みである。

国際金融センターとしての香港の将来（未来）

香港の現状を踏まえ SWOT 分析を行った結果、強み、弱み、機会、脅威をそれぞれ分類した。これまで述べてきた、税制や成熟した金融市場、国際金融取引の行いやすい市場環境やカレンシーボード制という強みを持っていることに加え、ASEAN-中国の自由貿易協定によるプラスの影響がでるのではないかと期待や、CEPA による中国本土との典型など期待できる部分が多い。

一方弱みとしては昨今の中国の急成長に伴い、安定した通貨などの魅力から、中国との橋渡し役として発展している傾向があるため、過度の中国一への依存によるリスクを抱えている。また、香港独自の魅力をシンガポールなどのアジアの他の国々と比較した際に持たなければならない。そして、脅威として元の取引が自由化され、元が変動相場制へ移行した場合、香港ドルの存在意義がなくなってしまう可能性という脅威が存在している。

それらを受け、今後は、香港はシンガポールだけでなく、北京や上海とも競争していかなければならない。また、弱点と言われている債権市場のうちイスラム金融などに注力してみることも一つの手段である。中国依存のリスクはあるものの、今後も中国への

外国からの投資の窓口としても成長できると考える。

感想：

国際金融センターとしての香港の過去・現在・未来についてプレゼンテーションを行った。今後の香港の方向性について、プレゼンテーションの準備のため、プレゼンチームで検討していた中で、過度の中国依存により「国際」金融センターではなく「中国国内」の金融センターとしての役割がよくなっていることや、過度の中国依存のために、中国の成長に大きく香港の将来も左右されることによる脅威を感じたが、プレゼンテーション後のディスカッションの際の香港大学の学生のコメントからは、過度の中国依存によるリスクや、香港の金融センターとしての今後に対する不安感は大きくなく、むしろ中国の発展とともに成長しようとしており、北京・上海・シンセンなど他の都市の台頭により香港の競争力が低下するのではないかという不安も大きくはなく、これまでの国際金融センターとして蓄積してきた経験や香港の国際社会に対する信頼度への自信がうかがえた。

以上

【活動報告】 Road to Great Hong Kong

説明者：鄭 自力、井上 透、小林 亜希子（6期生）

記録者：鄭 自力

< 目的 >

香港は、深センとともに 20 年間発展してきました。香港自身は実体経済を持っておらず、金融や物流などのサービス業が中心になっている。深センは 20 年前と比べて、政策優位性を失っている。香港と深センを統一し、お互いの優位性を総合し、更に発展できる提案をしました。

< 発表概要 >

1. 香港経済の過去、現在について
2. 近年の中国との関係、特に CEPA により香港と中国の関係の深化
3. 日系企業と香港、中国との関係
4. 香港の制度と経済優位性について
5. 香港と深センの現在の脅威について
6. 香港・深セン統一についての提案
7. 統一によるシナジーの計算
8. 日本企業のマザー工場の紹介
9. 台湾にマザー工場を建設した経緯
10. 香港と深センの統一により、日本企業が中国にマザー工場を建設する可能性
11. まとめ

< 所感 >

日本と香港は、同じ産業空洞化が問題になっていることを感じました。金融危機により、金融サービス業は大きなダメージを被っています。産業のない香港は、どう立ちなおるのを悩みました。香港は地理的に発展余地がなく、人口密度が近年高まっています。

一方深センはここ 20 年の驚異的な発展により、経済水準が香港と近くなっています。香港との統合により、金融サービスと産業の融合ができ、引き続き発展できると考えました。

香港大学 MBA との交流により、現地の学生と活発な意見交換が行え、大変有意義なものでした。

以 上

【活動報告】香港のテーマパーク産業について

説明者：寺崎、磯貝、宣（6期生）

記録者：6期生 宣

発表は3部構成のプレゼンテーションによるもので、初めに世界及び東アジアにおけるテーマパーク産業の現状を説明し、次に日本におけるテーマパーク産業の分析、最後に香港におけるテーマパーク産業の分析、事業戦略の提案を行った。

（1部）

最初に世界におけるテーマパーク産業の入場者ランキング及び地域別の分類を行い、次にアジアにおけるテーマパーク産業の現状を分析した。その中で全体の市場としては横ばいである中、ディズニーランドの優位性が際立った。一方で、倒産した企業が数多くあるなど厳しい淘汰が進んでいる。また業界の中で一人勝ちとも言えるディズニーランドの競争優位性がどこにあるのかを分析し発表した。

（2部）

2部ではテーマパークの概念、テーマパークの分類についての分析を行った。「エンターテイメント型」、「ミュージアム型」、「ファームパーク型」、「ウォーターパーク型」、「ゲームパーク型」の5種類に分類され、立地と設備により更に「都市型」、「観光型」、「ブランド型」に分類される。更に具体例を挙げながら、成功しているテーマパーク、失敗しているテーマパークの要因分析を行った。

（3部）

3部では上記の分析を踏まえ、3つのポイントが挙げた。成功しているテーマパークは映画産業と事業提携している。それらの殆どのテーマパークはアメリカ発である。ディズニーはアジアで多くのシェアを獲得している。これらを踏まえて以下の3つの仮説を導き出した。ディズニーランドは実は市場で飽和しているのではないかと。新たなカテゴリーの映画の需要があるのではないかと。アジアはオリエンタルな映画テーマパークを持っていないし、また求められているのではないかと。以上の仮説から人口動態推移、ポジショニング、SWOTによる分析を行い、カンフーをコンセプトとしたテーマパークの設立を提案した。

アジアにおけるテーマパーク産業は更に激化していくが、香港は競争力のあるオリエンタルな映画コンテンツを数多く保有している。またターゲットとしてテーマパーク産業の多くは女性、子供をメインターゲットとしており、かつ香港においての男性の観光の選択肢が少ないことが挙げられる。カンフーという世界的にも認知度の高いコンテンツを活用し、ターゲットを明確にして行く事が今後の香港におけるテーマパーク産業の成長戦略であると提案し、締め括った。

以上

【活動報告】香港における日系企業のビジネス戦略
(Doing Business in Hong Kong)

説明者：香港大学ビジネススクール

記録者：6期生 岡本洋幸

中国でSC40店舗の展開を目指す「イオンストアーズ香港」

- 同社は1987年に設立され、94年には香港市場に上場している。GMSの「ジャスコ」、10ドルショップの「ジャスコ10\$ PLAZA」、飲食の「Bento Express」を香港や深センにおいて展開している。
- 同社は、CEPA (Closer Economic Partnership Arrangement) を活用して、中国に完全子会社である「AEON China Co., Ltd.」を設立し、深センを中心に積極的に店舗を展開している。
* CEPAでは、香港と中国間における貿易や投資を促進するため、障壁となる関税などが免除される。
- 現在、イオンストアーズ香港の地域別売上高は香港65%、中国(子会社)35%となっており、中国の割合が増加している。
- 同社の特徴は驚異的な営業利益率にある。業界トップクラスと言われるウォルマートの営業利益率は3%であるが、一方のイオンストアーズ香港は6%を誇っている。
- 香港では食への安全・安心志向が高まっており、日本食の人気が高まっている。日本の食品を多く扱う同社へは、追い風が吹いている。
- 同社は、日本で進めてきたショッピングセンター事業を中国でも展開する方針で、2012年までに40のショッピングセンターを建設する予定。
- 一方、競争の激化や、中国特有の法制度などが課題として挙げられる。また、ガソリン価格については、香港では一時期1リットル当たり280円まで上昇し、車の使用が減ったことから、ショッピングセンターへの来客数に影響が生じた。

業績が順調に拡大する「MUJI」

- 良品計画は、生活雑貨専門店「MUJI」を香港に設立し、主要ショッピングセンターと香港国際空港に合計7店舗を展開している。店舗の立地がよいことから、業績は順調に伸びており、2007年の売上高は41億円、営業利益が5.3億円となっている。
- 香港へは1991年に現地の「香港永安百貨」と提携して進出していたものの、業績不振により一度撤退し01年に再進出した。
- トレードマークである「MUJI」の中国での使用を巡り、「Jet Best Investment」と争った。2005年になり、良品計画の主張がやっと認められた。決着まで約10年を要し、多少泥仕合的なこともあったことから、同社のブランドイメージは若干毀損した。

以上

【活動報告】 China economy and trade with Japan

説明者：香港大学ビジネススクール Xilan Li

記録者：6期生 寺崎一生

1. 2007、2008年の中国経済

1) 2007年の中国経済

- ・ GDPの実質成長率は11.4%
- ・ GDPの部門別の構成比は、農業11%、製造業49.5%、サービス業39.5%
- ・ 輸出額はFOB価格で約1.2兆ドル
- ・ 主な輸出相手国は、米国21%、香港16%、日本9.5%、韓国4.6%、ドイツ4.2%
- ・ 輸入額はFOB価格で0.9兆ドル
- ・ 主な輸入相手国は、日本14.6%、韓国11.3%、台湾10.9%、米国7.5%、ドイツ4.8%

2) 2008年の中国経済

アメリカで起こったサブプライム危機は中国の経済成長に以下のような影響を与えた。

- ・ アメリカ証券の評価減による中国金融機関の損失
- ・ 株式取引への悪影響と株価下落
- ・ 海外資本の流動先の不確実さ
- ・ 大きくなった中国の貿易額への悪影響

2. 中国における経済発展の課題

- 1) 十分な雇用の確保
- 2) 汚職や経済的な犯罪の削減
- 3) 環境破壊や社会紛争の抑制

3. 日本と中国の経済協力

- 1) 1978年からの中国の開放政策による共同した取り組み
- 2) 2007年の貿易額は約0.2兆ドル(13.8%)増加している。
- 3) 2007年の日本にとって中国は最大の輸出国で、中国にとって、日本は4番目の輸出マーケットとなっている。
- 4) 2007年の日本から中国と香港への輸出額は1,652億ドル(17.4兆円)で、中国から日本への輸出額は1,020億ドルで前年から11.4%増加した。
- 5) アジア金融危機の再発防止のために60億ドルの通貨交換協定を結んだ。
- 6) 中国での投資額と投資範囲を拡大した。

(感想)

中国では雇用確保のために、年間11%の経済成長が必要だと言われている。その達成のために、中国は今後も開放政策を進め、海外との経済連携を深めていくものと考えられる

が、それはアジア地域の経済的な安定を図る意味でも不可欠であり、アジアの金融センターだけでなく中国の窓口としての役割も持つ香港は、経済連携を推進する上で重要な役割を持っていると感じた。

【活動報告】HKTDC（香港貿易発展局）

説明者：海外推進部門長 アイリス・ウォン氏

記録者：5期生 高橋利幸

中国でのビジネス機会、その際に香港を活用する利点、HKTDCの役割等について、アイリス・ウォン海外推進部門長より約1時間、講義が行われた。その後、HKTDCが運営している図書館、PCルーム等を見学した。

1. 中国でのビジネス機会

中国は10年連続GDP成長率9.8%超、最近10年間の年間貿易取扱高の増加率23.3%、大規模な対外直接投資（US\$924億・2008年）など、新たな世界経済牽引ドライバーとしての期待が高まっている。もはや「低コスト生産基地」にとどまらず、世界は未だに中国に注目している。中国でのビジネス機会は大きい。

成長する消費者市場（例）

- ・増加する中間所得層は年間2億人
- ・増加する国内消費（2008年増加率21.6%）
- ・携帯電話保有台数6億4,100万台（2008）
- ・インターネットユーザー約3億人（2008）
- ・増加するワイン輸入（2006年～08年72.7%）
- ・世界第二の自動車市場
- ・世界第二の高額商品市場
- ・2020年までに海外旅行者数年間1億人
- ・成長する内陸部消費市場

2. 中国の課題

外資企業が持つ懸念として、中国が世界同時不況を乗り切る力があるか、よきビジネスパートナーを見つける事ができるか、利益を実現化できるか、政府機構との付き合い方法などがある。つまりビジネスリスクの軽減に対する不安を中国は取り除く必要がある。

3. 香港の利点

弾力性ある経済、理想的立地について、利点がある。弾力性ある経済では、サービス志向の経済、「一国二制度」、強力な法律制度、知的所有権の保護、情報・人・商品・資金の自由な流れ、開放的で透明性の高い政府、汚職を嫌う文化、サービス業主体の経済などが例にあげられる。

理想的立地としては、アジアの主なマーケットに4時間以内に到達できる、直近の市場である、珠江デルタの人口4700万人、全中国の輸出入シェア24%などが例にあげられる。

4. HKTDC の役割

国際貿易の機会を創出するため、市場調査関連の刊行物発行など情報提供を行い、10 万社以上のサプライヤーとのビジネスパートナーマッチング、顧客の紹介を主な役割としているとのことだった。

5. 図書館等の見学

中国・香港をはじめ、世界中の貿易関係の資料を利用者は無料で読むことができる。また PC ルームでは、たとえば日本の情報については帝国データバンクと提携を結んで、日本企業の情報を無料で手に入れる事ができる等、ここに来れば様々な貿易情報が手に入る。

所感

アイリス・ウォン海外推進部門長は、エネルギッシュな女性で、流ちょうな日本語で講義をしてくれたので香港に関する理解度が深まった。中国本土と貿易をする際に、香港を通したほうがよいことを熱心にアピールしていた。これは最近、中国とのビジネス拠点地として、上海にその地位を奪われていることが理由ではないかと感じた。しかしながら、中国への海外直接投資の 40%が香港経由であるなど、中国本土との重要な中間ポイントなのは間違いない。また街には、外国人ビジネスマンが多数いた。今後、アジア貿易の中心地として国際都市香港の動向が楽しみである。

以 上

【活動報告】新光証券（香港）有限公司
証券投資における中国の国際化と中国の景気対策

説明者：新光証券（香港）有限公司 千島徹氏、李書楷氏

記録者：6期生 池田泉

証券投資における規制緩和（中国 海外）

- QDII（Qualified Domestic Institutional Investors：適格国内機関投資家）とは、承認を受けた中国の機関投資家に対して、海外証券資産への投資を制限付きながら認めるものである。（QDII 投資枠：合計 425 億ドル/30 機関）
- 中国の QDII は、商業銀行、保険会社、証券業経営機関の 3 本柱で構成されるが、それぞれ監督官庁と準拠法が異なるなど、独自のスキームが形成されている。

証券投資における規制緩和（海外 中国）

- QFII（Qualified Foreign Institutional Investors：適格海外機関投資家）とは、中国に批准を受けた海外の機関投資家に対して、国内人民元建証券資産への投資を制限付きながら認めるものである。（QFII 投資枠：合計約 300 億ドル/76 機関）
- 投資対象は外貨建以外の取引所上場株式（含む新株発行）、上場債券、証券投資ファンド、上場ワラント、CSRC（中国証券監督管理委員会）が認めるその他金融商品である。

中国の政府系ファンド

- CIC（The China Investment Corp.：中国投資有限責任公司）とは、中国政府が保有する外貨準備資産を運用するために 2007 年 9 月に設立されたものである。
- 資本金 2,000 億ドルのうち、3 分の 1 は海外投資、3 分の 1 は中央匯金投資責任公司、3 分の 1 は中国開発銀行と中国農業銀行に出資する計画である。
- CIC の対外投資例としては、米国のブラックストーン（30 億ドル）やモルガン・スタンレー（50 億ドル）等の実績がある。

中国の景気対策と注目される投資分野

- 中国の GDP は 2008 年前半までは二ケタ成長を維持してきたが、世界的な経済の混乱が深刻化した昨秋以降は急減速している。13 億人もの人口を抱える中国では、雇用を拡大し社会の安定を維持するためには、8%成長を維持しなければならない。
- 中国では、GDP に対する輸出の割合が約 4 割（日本：約 1 割）と高く、外需の落込みが企業収益の急速な悪化に直結する。このため、中国政府は輸出関税の税率引下げや付加価値税の還付を増やし、輸出企業の支援を行う見通しである。
- 今後の中国への証券投資に関しては、昨年 11 月に決定した 4 兆元（約 58 兆円）の景気刺激策によるインフラ整備分野（特に鉄道）や、社会安定策として資金が投下される社会保障・医療分野が注目される。

以上

【活動報告書】QBS 教授特別講義

説明者：村藤功教授

記録者：6期 清原茂森

香港科学技術大学（Hong Kong University of Science and Technology：HKUST）ビジネススクールでの村藤功教授による特別講義および相互の学生交流に先立ち、香港科学技術大学ビジネススクール学生である大前敬祥氏より香港科学技術大学ビジネススクールの概要およびビジネススクールに在籍する日本人学生が中心となって運営する「Japan Club」（日本についての理解を深めてもらい、将来ビジネス界で活躍が期待される各国から集まっている学生に日本好きになってもらうための活動）についての紹介が15分程度あり、QBS側参加者との間で質疑応答があった。また、村藤功教授による特別講義終了後には、香港科学技術大学ビジネススクール側にご提供いただいた軽食を取りながら、相互の出席者間で活発な交流がおこなわれた。

<特別講義> Doing Business in Japan 村藤功教授

・講義概要

- 1-a. The magnitude of the emergence and the burst of the bubbles
- 1-b. Population decrease and aging society
- 2-a. Life time employment
- 2-b. Management based on self-responsibility
- 3-a. Japanese readership
- 3-b. Decision making system

まずは、バブル崩壊後の日本の財政現状の変化、少子高齢化による労働力不足問題など日本経済の概況と問題点を指摘し、日本の雇用システムや組織マネジメントについて欧米と対比しながらその特徴を明らかにした。日本企業における意思決定プロセスがどのようにおこなわれるか、リーダーの役割がどのようなものであるかが説明され、日本企業では人や組織を動かすにはバランス感覚が重要であることも説明した。

講義終了後、香港科学技術大学ビジネススクールの学生より「日本特有の意思決定システムは今後10年で欧米式に変化するか？」や「日本と欧米ではCEOの役割は異なるか？」などの質疑があり、村藤功教授がこれらに回答し、参加学生は一層の理解を深めることができたと思われる。

以上

【活動報告】 東莞友池精密機械有限公司

説明者：東莞友池精密機械有限公司 佐海氏、五十嵐氏、二部氏、前田氏、太田垣氏

(役職略)

記録者：5期生 高木恭一

1. 会社概要

開始にあたり、東莞友池精密機械有限公司の方々から同社の概要について説明を受けた。

- ・社名 東莞友池精密機械有限公司
- ・所在地 広東省東莞市清溪鎮三中村有成路
- ・設立日 2005年8月5日(工場稼働は2005年11月)
- ・資本金 3,000,000 U S \$
- ・敷地面積 9,753m²
- ・従業員数 2008年12月末現在 801名(男女比率は女性85%、男性15%で、工場仕事の従業員のほとんどが中国全土からのいわゆる出稼ぎ労働者で構成)
- ・事業内容 バックライトユニット組立、テープ・絶縁シートプレス加工・販売
- ・その他 同社はC D W Holding Limited(シンガポール証券取引所メインボード上場)の100%子(孫)会社である

2. 工場見学

会社概要の説明の後、同社の有する工場(A棟 テープ・絶縁シートプレス加工工程、B棟 バックライトユニット組立工程)の見学を行った。

3. 質疑応答(順不同)

工場見学の後、意見交換・質疑応答を行った。内容は以下のとおり。

- ・大阪に本社を置く友池産業が中国に進出したきっかけは何か？
最初は日立が蘇州に進出したことを機に、物流メリットも勘案し近隣に工場を持つべきと判断し、蘇州に進出。その後シャープが東莞に進出したことから、同様の考えで東莞にも進出。
なお、お金の持出しの関係から香港に会社を設立。
- ・本社が香港の会社がなぜシンガポールに上場なのか？
上場の際、シンガポールの投資家がお金を出してくれるという背景があった。
- ・中国進出にあたって、メーカーからの支援はあったのか？
特にない。
- ・中国全土から従業員を受入れているが、言葉の支障はないのか？
基本的に北京語を共通語として問題はない。

- ・従業員の給与水準はどのくらいか？
月に2,400元ほどであるが、周囲の企業に比べると高い水準にある。
- ・決算や経理処理はどのように行っているのか？
決算期は1～12月であるが、決算業務や資金管理はすべて香港で行っている。
- ・従業員への給与の支払いはどのように行っているのか？
すべて口座振込みである。
- ・ガバナンス組織について、なぜホールディングのもとに香港友池を置き、その下にその他の会社を置く形にしているのか？
税務メリットを最大限享受できる形としている。
- ・雇用契約をすぐに解除できるような形にしているのか？
30日前に通告すればよい。ただし、補償は必要となる。
- ・中国から学ぶことは何か？
若い人の情熱と自分への投資には貪欲で努力もする。
- ・寮での共同生活でもめごとはないのか？
各部屋にリーダーを任命しており、ここ2年は問題ない。ただ、基本的に自分に関係ないところは構わないというのが文化で、自分以外のところは清掃もしない。個人の境界線がハッキリしている。
- ・QC活動はどのように行っているのか？
こちらから強制的なテーマは与えない。自分たちで作る。そうすると一生懸命にやる。うまくいっていると感じているが、5Sは基準がないから難しい面もある。
- ・ISO取得を行っているが、役に立っているのか？
ひとつのルールになっていることから、役に立っている。
- ・離職率が高いが、離職率を低くするためにお金の面以外に苦労していることはあるのか？
能力に応じて能力給と仕事の幅を持たせ格差をつけることでモチベーションアップにつなげている。食事も3食支給しており、果物も支給することがある。また、レクリエーションの開催もするなどいろいろな工夫をしている。

4. 所感

実際に働いている従業員の人々と話すことができず、寮をはじめとした環境なども見ることができなかったことが残念であったが、厳しい労働環境の中、おそらく競争心やハングリー精神は相当あるのではないかと感じた。我々の世代も含め、今の日本人に欠けてきたものを彼らは持っており、とても脅威に感じた。

昨今の未曾有の経営環境の中、自分の職場に戻って、今回の経験を少しでも周りの人と共有し、我々なりのハングリー精神の醸成とモチベーションの向上につなげたいと感じた。

以上

参加感想

1. 岡本洋幸 経済学府 産業マネジメント専攻 1年 (学生リーダー)
2. 小林亜希子 経済学府 産業マネジメント専攻 1年 (学生リーダー)
3. 鄭自力 経済学府 産業マネジメント専攻 1年 (学生リーダー)
4. 池田泉 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
5. 磯貝健哉 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
6. 出田貴宏 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
7. 井上透 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
8. 浦上早苗 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
9. 清原茂森 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
10. 宣虎長 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
11. 寺崎一生 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
12. 浜崎孝宏 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
13. 三浦智穂 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
14. 米川真 経済学府 産業マネジメント専攻 1年
15. 江上直人 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
16. 小栗康生 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
17. 加藤雅子 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
18. 鎌田幸治 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
19. 齊珂 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
20. 高木恭一 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
21. 高橋利幸 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
22. 松尾光展 経済学府 産業マネジメント専攻 2年
23. 橋本容典 経済学府 修士課程 1年
24. 香月佑太 経済学府 修士課程 1年

参加感想(1)

報告者：産業マネジメント専攻1年 岡本 洋幸

現在、WBC が開催されており、日本代表は海外のチームと戦っている。プロといえども、国際試合になると多少堅さが見受けられる。WBC は数年に1回の開催であるが、QBS では年に2回、アジアの主要ビジネススクールと国際交流を行っている。自分自身の MBA のレベルをグローバルな視点で確認できる機会が年に2回もあるわけである。

私は幸運にも、前回のタイ(2008年8月)に続いての参加となった。今回は、香港大ビジネススクールでのプレゼンテーションの他、「ICABE 香港」全体のとりまとめも行った。そこで、とりまとめ役として感想を述べたい。

今回の ICABE には、いくつか特徴がある。1つは、丹羽教授の「アジア財務」クラスからの参加者も含めて総勢 27 名と、参加者がこれまでの2倍近い規模になったことである。航空券などの手配は旅行会社をお願いしたが、前は旅行会社を通さなかったことから、前回幹事の小寺さんや富松さんは大変苦労されたと推測される。

2つは、学生自身が訪問先の企業・大学を探してくれたことである。お陰で、深センへの視察の他、九大の提携校ではない香港科学技術大学ビジネススクールとも交流ができた。深セン視察に参加したメンバーの話によると、深センでは、世界同時不況により10万人が職を失ったものの、現在は5万人の求人があるとのことである。ダイナミックな中国経済に直に触れてきたようで、参加者の表情は生き生きとしていた。

深セン視察と同日に、香港科学技術大学ビジネススクール(香港科技大)を訪問した。香港科技大は世界のトップ20に入るビジネススクールで、欧米やインドなど、世界から優秀な学生が集まっている。香港科技大では、日本企業の戦略に関心のある MBA 学生の集まりであるジャパンクラブが私たちを招待してくれた。ジャパンクラブでは、日本人学生がリーダーを務めており、リーダーシップの勉強にもなった。なお、香港周辺のビジネススクールは日本人同士のネットワークがあり、中山大学嶺南学院(広州)の MBA 学生からも交流の申し出があり、彼らは QBS の深セン視察組と合流し交流を深めた。

3つは、香港大でのプレゼンテーション希望者が予想に反して少なかったことである。ICABE の醍醐味は、やはり海外の大学でのプレゼンテーションにあり、これはビジネスでも観光でも体験できない。お互いに言葉や考え方は違うものの、MBA 取得という同じ志をもった仲間である。そういった立場で交流できる機会は少ない。

課題としては、私自身も含めて学生の英語力である。香港大でのプレゼンテーションをみると、どのチームも発表をそつなくこなし、ユーモアのセンスもあった。ただし、質疑応答になると、返答に時間がかかる場面がみられた。英語力の向上については、学生によって温度差があり、各学生にゆだねられる。ICABE の学生(私自身も含めて)は、ぜひ率先して英語力の向上において周囲への好影響が期待される。

最後になるが、今回の ICABE もこれまでと同様に、とりまとめ役以外にも参加者の皆さんに会計係や書記係などの仕事をお手伝いいただいた。感謝の気持ちで一杯である。

以上

参加感想(2)

報告者：産業マネジメント専攻1年 小林 亜希子

今回 ICABE に参加するのはタイに引き続き2度目であった。

香港出身の友人がいるのだが、彼らが決して彼ら自身を「中国人」とは呼ばず「香港人」と主張する点に、「中国本土とは違う」という彼らのプライドを感じていた。その違いを実際に学び感じる事が今回の ICABE における個人的な目標であった。そして短い滞在ではあったが、中国における香港の特徴を学ぶことができた。

海外進出する企業にとって、中国はアジアの中で巨大な市場であり、無視することはできない存在である。しかし、歴史、言語、文化、政治など様々な分野でビジネスの障壁となる問題が多いのも事実である。とくに不明瞭な中国政策は大きな障害である。政府、企業から提供されるデータの信頼性も低い。こうした問題は、中国の人権費高騰につれ、外国企業の投資が東南アジアへ移っていく原因となる。

一方、香港は外国企業を誘致するための明快な政策、高い教育水準、独自の通貨などイギリス文化が混ざった香港の土地は外国人にとって居心地がよく、英語も共通語であることは外国企業にとって大きなメリットである。とくに、香港大学でのセッション、香港科学技術大学への訪問を終えて、大学の教育水準の高さ、彼らの国際性を強く感じる事ができた。

こうした外国企業と中国本土の窓口、またアジアの中でハブとしての地理的役割など、香港という小さな島が占める役割は大きい。

今回の ICABE を通じて、中国はとても大きく、地方ごとに様々な文化を持っていることに気付かされた。その土地ごとにある文化の特性を理解することは、ビジネスをする上で重要な点である。中国をより深く知るために、今後たくさんの土地を訪れてみたいと思う。

以上

参加感想(3)

報告者：産業マネジメント専攻1年 鄭 自力

香港には数回行ったことがありますが、ほとんど通過するだけでしたので、現地の物価、実体状況、交通などについてよく知りませんでした。今回3日間の滞在で、JETRO 香港、香港大学とのプレゼンテーション交流により香港について具体的なイメージができました。

16年前、約2年間深センで仕事をしておりまして、また2000年にも行ったことがあります。しかし、当時と比べ大分違うと感じました。そして今回の訪問で更に深センが変化していると実感しました。今回の交流会から色々な刺激を受け、また機会があれば参加したいと思っています。

1日目のJETROとの交流で、これまで不明であった香港と日本の関係が鮮明になりました。香港と日本の貿易額(2007年)日本は3位、輸入2873億HK\$、輸出1196億HK\$。驚いたのは、日本の食品輸出先の1位が香港だったことです。2008年の輸出が金額は、約95億円、シェア18%。このことは後日行ったデパ地下食品コーナーに日本食品が溢れていたことに一致しています。

2日目には、香港大学とプレゼンテーション交流を行いました。1ヶ月以上前から、仕事の合間に打合せを行ってきました。香港大学の学生に負けないように、中国に交換留学中のメンバーともプレゼンテーションのリハーサルを行い、夜中2時すぎまで事前準備を行いました。その結果、非常に満足のいくプレゼンで、高い評価を頂いたのですが、その反面ディスカッションでは伝えたいことを伝えられず、英語のコミュニケーション能力の乏しさを痛感しました。

午後の新光証券の訪問では、日本金融機関の中国での業務内容を「アジア・財務戦略」授業の内容と合わせて聞きながら、日本企業の財務戦略の理解が深まり、全体のイメージが出来ました。中国政策中の適格国内機関投資家(QDII)または、適格国外機関投資家(QFII)制度の紹介により、中国の政策内容を理解できました。

3日目には、深センの日系企業を訪問しました。日系企業と言っても、シンガポールで上場しており、すべての工場は中国にあります。多国籍企業を顧客とする多種多様な精密部品の製造・販売をしています。金融危機により、今年は生産量が半分まで減りました。今回の金融危機は実態経済に深刻なダメージを与えていることを実感しました。それから、現地企業の経営者たちと会いました。海外で頑張っている日本企業の姿を見ることができ感動しました。

今回のICABEでは、授業内容と実態経済ともに、色々な方と交流して、授業を深く理解し、貴重な体験を頂きました。そして、機会を与えてくださった大学、工場見学をともにした先生方、かけがえのない体験を共有することができた同窓生に感謝したいと思います。

以上

参加感想(4)

報告者：産業マネジメント専攻1年 池田 泉

香港を訪問して驚いたのは、日本の食材に対する関心の高さである。シティースーパーやSOGO等では、割だかの日本の食材を買い求める多くの人々を目にすることができた。日本からの輸入品といえば一定のブランドイメージは確立されていたが、現在の中国を取り巻く食料事情から鑑みれば、食材における「安全・安心」のためには少々高くとも購入するという意識変化を感じさせる出来事だった。香港のみならず、中間所得層が毎年拡大している中国本土においても、今後のビジネスチャンスを期待できるだろう。

また現在の世界的な不況について日本人と香港人のとらえ方の違いを知ったことも収穫のひとつだ。悲観論に傾きがちな日本人とそれを感じさせない香港人の考え方である。「今、何をしなければいけないのか。買わなければいけないのか。売らなければいけないのか。今、すべきことのベストは何か。」といった言葉が刺激的であった。アジア通貨危機やSARS等の大きな経済の変化を経験した香港人のタフさを感じるとともに、大切な考えだと共感した。

香港科技大(HKUST)の訪問は、私にとって非常に印象に残るものとなった。HKUSTの海を望むロケーションも気に入ったが、初めて海外のビジネススクールの学生と交流し意見交換できたことが嬉しかった。そして、彼らの自由な発想と目標に向けた強い意志、特に、MBAにかける情熱とキャリアアップ志向に圧倒された。QBSでの1年目が終了しようとしているこの時期に、彼らに出会ったことで自らの入学当初の思いが薄れつつあることに気づかされ、また初心を思い起こして帰国の途に着いた。この思いをQBSの2年目に活かしていきたいと考えている。

最後に、この香港でのICABEを素晴らしくコーディネートして頂いた、岡本氏、鄭氏及び浦上氏には感謝したい。

以 上

参加感想(5)

報告者：産業マネジメント専攻1年 磯貝 健哉

今回、初めて ICABE に参加した。前回の参加者から ICABE の話は概ね聞いており、ある程度の満足感は期待してはいたものの、予想以上に有意義なプログラムであった。個人的に印象に残った点を、メインスケジュール以外のことを中心に報告したい。

香港大学の討論会について

今回、宜さん、寺崎さんと「香港のテーマパーク産業」について発表を行った。内容については別項に報告があるため、あえて詳細は言及しないが、海外のビジネススクールの学生との討論会の緊張感は筆舌しがたいものがあった。しかし、スポーツの試合後の選手のように、発表後はお互いに称え合い、より友好的な関係が築けたと考える。また、個々のプレゼンターにとっても、今後の課題や反省点が明確になったと考える。

香港の街について

今回のスケジュールでは、個人の自由な時間は夜間の限られた時間だけであった。そのため、できるだけ歩いて街中を回ろうと考えた。香港の街(ダウンタウン)は「九龍」と「香港島」に大きく分けられる。混沌とした中にも街区が整理された「九龍」。都会的ではあるが、街区が入組んだ「香港島」。2つの個性ある街がヴィクトリア港を挟んで位置しているところが大変興味深い。しかし、共通しているところは「通り」に強い個性があるということである。例えば、女性用品のものが売られている「女人街」、骨董品やガラクタが売られている「キャットストリート」等々。日本でもその類の通りは時々見られるものの、最近は大変少なくなってきたと感じる。また特筆すべき点は、その通りと他の通りが交差するクロスポイントには、新たなビジネスが展開されているということである。飲食関連もあるが、各々の共通項のアイテムを取扱う店舗が多かった。これらのことは、中国ビジネスを考える上でも大変興味深いものであった。

QBS の学生について

最後になったが、今回の ICABE を通して、私の一番の収穫は、やはり QBS 学生の結束力である。日頃は実務を行いながらの授業であるため、お互いを知るには物理的に時間の制約がある。このように日常から開放された時間を長時間共にすることは、私にとって初めての体験であった。日頃話せないことを、時間を気にせず語り合ったり、たわいもないことを語りながら街中を歩き回ったりするは、社会人になってからは非常に難しいことであり、それが生きるための新たなヒントになることもある。今回、改めて QBS の仲間のありがたさを痛感した。

以上が、私の ICABE の感想である。今回、ご指導いただいた先生方、スケジュールの管理をはじめ、事前準備を頂いた学生代表の方々、現地のコーディネーター・通訳をしていただいた鄭さんに改めて感謝したい。

以上

参加感想(6)

報告者：産業マネジメント専攻1年 出田 貴宏

目覚しい経済発展を続けてきた中国経済。世界中が中国市場に注目する中、中国進出を検討する際の入口として香港の存在感が際立っていることを改めて認識した。今回、初めての香港を訪問したのだが、この点を現地ではっきり確認できたことは私にとって大きな収穫であった。

また中国広東省の東莞・深圳への弾丸バスツアーで、日系企業の中国進出の実情について聞いた生の声も非常に印象的だった。遠く中国大陆に渡った日本人技術者が現地で燃やし続ける「日本魂」。私は同じ日本人として非常に誇りに思う反面、彼らの口から出た「中国の『若者の情熱』と『家族愛』に惚れこみ中国を目指した。」という言葉に、複雑な思いを感じずにはいられなかった。彼らが技術と魂を引き継ぐ先として選んだのは、現代の日本ではなく中国であった。この成長著しい大国に、かつて自分達が見てきた貧しくも前を向いて努力していたかつての日本の姿を重ねて見たのではないだろうか。「世界の工場」たる中国の生産現場にふんだんに取り入れられた日本式の管理手法を見ながら、閉塞感に苛まれる日本経済に対するもどかしさ、やるせなさを感じずにはいられなかった。

以下、私自身が興味を持った点、思うところについて簡単に述べてみたい。

(1) 中国進出の窓口としての香港

人口 700 万人、東京都の半分の面積しかない香港が注目を集めている理由の一つに中国進出の窓口であることが挙げられる。イギリスの法制度に則った自由主義経済を続けている点、国際調停機関が香港に設立されている点（HKDTC の説明より）、製品の信用度の高さ（中国富裕層が本物を求めて香港の高級店で列をなす現象）、中国国内の内部留保遷移のルートとしての重要性（人民元は直接外部持ち出し不可）などの理由を考えてみても、カンントリーリスクの高い中国にいきなり進出せず、香港に法人を設立し中国進出の足がかりを作る意義があると強く感じた。ここが、香港のライバルとして同じように発展を続ける上海に対する優位点と言えるだろう。

(2) 日本ブランドの農作物の進出

イチゴの「あまおう」を始めとした日本ブランドの農作物については、その品質の高さもさることながら、安全性、信頼性の面からも高く評価されているようだ。価格もりんご「ふじ」などでは中国産の5倍の価格をつけても売れていく話を聞き、非常に驚いた。日本ブランドの高さを裏付けるもう一つの事例として、偽ブランド問題がある。香港市民の台所「ワンチャイマーケット」を歩いた際にも、イチゴのパッケージに「博多のとよのかの、横浜の」と意味不明な日本語が記されており、通常の価格より少し高いくらいの価格で販売されていたのを目撃し、思わずふき出してしまった。

(3) 香港の活気

昼時ともなると街の飲食店はどっと人で溢れ返り、街の至るところで賑わいを感じた。また海峡を挟んで九龍半島、香港島それぞれにはきらびやかなネオンが煌々と焚かれ、活況を呈している。その間を 10 分で繋ぐ渡船は 15 分おきに出ており、地元の人々、観光客を満載して航行を続けている。金融機関やホテルなどの近代的な高層ビルが立ち並ぶすぐ裏では日々の生活を支えるマーケットに人が溢れ返っている。香港は小さく密集した都会であるため、狭いエリアに様々な機能が雑然と集約されている。活況を呈しているアジアの主要都市に共通する「雑然とした賑わい」を感じることができた。

(4) 香港と深圳の違い

自由で明るい「陽」の活況を呈する香港に比べ、わずか 30 年間で 200 倍も人口が激増し急成長を遂げたという成長著しい深圳からは、同様の活況を実感できなかった。確かに高層ビルができ、たくさんの人であふれかえっているのだが、街全体に華やかさが無い。むしろ殺伐としたものすら感じる。社会主義を基盤とする中華人民共和国だからなのかなんとか納得していたのだが、クラスメートのさりげない一言にはっと気付かされた。それは銀行員として数多くの顧客に接している米川さんの「深圳の女性は皆笑顔が無く険しい顔していますね。」という指摘だった。たった数時間の滞在で全てがわかるとは思えないが、香港と深圳の違いを端的に現している言葉ではないかと思う。

アジア財務戦略(丹羽先生)、中国ビジネス(朱先生)の授業で出てきたテーマについて、現地でアジア経済の実態を垣間見ることができ、授業の理解度が更に深まった。また、同行したメンバーの何気ない一言に気付かされる場面も多く、メンバー独自の視点を通じた気付きを共有できたことも満足度が高まった理由だと思う。

私自身、I C A B E には初めての参加であったが、今回の香港プログラムは非常に有意義であった。裏方としてお世話してくれた I C A B E 担当の岡本さん、小林さん、鄭さん他、関係者の皆さま方には改めて感謝申し上げたい。

以 上

参加感想(7)

報告者：産業マネジメント専攻1年 井上 透

香港への渡航は今回が3回目だったが、これまでの観光とは違い「サブプライム問題に端を発した金融危機直後の香港および中国華南地域を肌で感じたい」という明確な目的を持っての参加だったので渡航前から興奮していた。また今回は旅行のガイドブックの代わりに、アジア財務戦略の講義で香港の金融について学び、香港大とのセッションの準備で香港及び中国華南地域の関係について事前にしっかり学習してからの参加となった。

香港は相変わらず熱気に満ちた国であり、現地および中国人だけでなく欧米人や中東の人間を街中で普通に見かけることができ、多様な人種の集まる都市だと実感できた。また企業訪問を重ねて感じたのだが、今回の金融危機に対して香港の人々は日本人ほどの悲壮感を持っていないと感じた。これは単に日本人が悲観的に物事を考えすぎているのか、もしくは香港人は90年代後半に起こったアジア金融危機を乗り越えた自負があるからであるのかまでは理解できなかったが、個人的には結局は前向きにこの不景気を捉えて頑張らなければいけないという元気をもらった気がする。

今回は香港大とのセッションにも参加し、貴重な経験をさせてもらった。私に与えられたプレゼンの時間は8分間であったが海外の学生を前に英語でプレゼンでき、非常に心地の良い高揚感及び達成感を覚えた。これはこの1年間のQBSの講義において人前で自分の考えを確実に伝える訓練をした賜物ではないかと思う。QBSに入学する前であったならば、恐らくひどく緊張するだけで楽しむ余裕はまず無かったと想像できる。また香港大MBAに留学している日本人学生と場所を変えて交流する機会があり、香港の経済や香港大MBAのこと、そして彼自身のキャリアゴールを聞くことができ刺激を受けた。また今後の日本についての議論を交わすことができ、海外にいる日本人から見た視点というものも感じることができ面白かった。

最後に今回は深センへ移動して日系企業を訪問することができた。深センの印象としては香港同様に大都市であったが、街自体が汚く感じられた。また実際に治安も悪いと聞いて、目と鼻の距離にある香港と深センでも国が違えば文化も異なるということを実感した(現在は一応同じ国ではあるが)。日系企業では日本人経営陣に様々な質問をすることができた。その中で忘れられない言葉があった。それは中国では模倣品が飛び交っており、日本の技術が脅かされる危険性がないかという問いに対して、「日本人は毎日改善する心構えがあり、それは簡単に中国人には真似できない」という回答であった。

今回のツアーは物事を一面から見るのではなく、多方面から見ることができ、非常に勉強になった。今後もICABEに参加する機会があれば、是非参加したいと思う。

以上

参加感想(8)

報告者：産業マネジメント専攻1年 浦上 早苗

世界同時不況の真っ只中に、香港の金融セクターや投資誘致の担当者から経済の現状を聞け、有意義な訪問事業だった。

昨秋のリーマンショックに端を発した金融危機が、財務健全性の高い日本経済に与える影響は限定的だと見られていたが、実際には、東証の株価は欧米やアジア各国以上に下落した。また、輸出依存型の製造業のリスクも浮き彫りとなった。

仕事の中で、「日本人は悲観的すぎる」「マインドの悪化が实体经济をいっそう冷やす」との意見を耳にすることが何度かあり、香港では金融の状況以上に、景気や消費者マインドを読み取りたいと考えていた。たしかに、接したほぼすべての人が景気悪化を指摘し、新光証券では取引が激減しているとのデータもあったが、個人消費の動向との関連は、日本より薄いという印象を受けた。

香港科学技術大学訪問では、日本人学生3人が進行を担ってくれたおかげで、1回限りの学生交流にとどまらない成果が得られた。

50大学以上と提携し、学生の6割が最後の1学期は交換留学に行くこと。留学先は成績順に選択できるため、競争原理が働いていること。フルタイム学生とパートタイム学生の違い、日本企業による奨学金制度など、興味深い内容だった。

また、同大のフルタイム学生は、職を辞して学んでいるにもかかわらず、金融危機で就職が非常に困難になっており、就職浪人を選ぶ学生も増えているという。グローバル人材の獲得は日本の成長シナリオに不可欠な課題であり、欧米企業の採用意欲が弱まっている今は、高級、高ポジションを提示できない日本企業にとって、またとない好機と感じた。

自由時間には香港のスーパーに出店している福岡の業者からヒアリングができ、日本で実績のない零細企業が海外市場に積極的に出ていることや、福岡県の農産物物流システムの優位性がわかった。現在、いちごの傷みを減らすため、宙ずりにして移送できる包装物を展開している地場企業のヒアリングを計画しており、香港で得た見識を自身の仕事にもフィードバックしていきたい。

以上

参加感想(9)

報告者：産業マネジメント専攻1年 清原 茂森

今回 ICABE に参加できたことで、短い時間ではあったが JETRO 香港、HKDTC、新光証券(香港) 香港科学技術大学ビジネススクール、福岡県香港事務所と多くの機関を訪問し、また、街中での人々の活気あふれる日常生活に触れることができ、アジアの金融・物流の主要拠点である香港の現状を肌で感じる事ができた。

世界的な金融危機や経済不況の現況下でも、香港の将来について悲観的な意見を聞くことはなく、各機関は香港の優位性を最大限に活用した積極的な対外活動を実施し、中国の対外窓口としての役割は、今後ますます大きくなるのではないかと感じられた。

市中のマーケットには日本産の食料品が豊富に流通しており、福岡県産イチゴ「あまおう」は高価 (HK\$80 ~ 100/pack : 1HK\$=約 13 円) にもかかわらず良く売れている。日本産食品に対する信頼は非常に高く、「日本産」というブランド価値が評価され、日本の農業にもビジネスチャンスが残されていることを実感できた。

香港科学技術大学ビジネススクールは EMBA 世界ランク 1 位、MBA 世界ランク 17 位の実力校で、4 人の日本人を含む 20 名程度の学生と交流することができ、互いに MBA を目指す学生として刺激を受けた。また、香港に拠点を置く日系企業が連携して、香港のビジネススクールで学ぶ日本人学生のために学費の一部を援助していることを聞き、感銘を受けた。

香港は、背後に控える巨大市場である中国本土への入口、華南地域の生産工場の対外出口としての対中国ビジネスの重要な役割だけでなく、世界各国から優秀な人材も集結しているため、QBS としても香港にある各大学のビジネススクールを提携し、積極的な学生交流をする必要があるのではないかと強く感じられた。

以上

参加感想(10)

報告者：産業マネジメント専攻1年 宣 虎長

今回の香港 ICABE プログラムに参加して、香港で良かったなというのが率直な感想である。なぜならば随所に Diversity な都市であるとはこのようなことなのかという場面あったからだ。それは休日の数多くの人種が入り乱れたヴィクトリアパークの市場であったり、香港大学や香港科技大の学生の多様性であったりである。

今回のプログラムで、最も印象に残っているのは香港大学でのプレゼンテーションである。事前のグループワークではかなりの時間を費やした。「香港で福岡のビジネススクールに通う私達が伝えたい事は何なのか?」「香港という都市はどんな都市なのか?」というアウトラインの模索から始まり、グループメンバーとのディスカッション、役割分担等、辛い作業でもあった。プレゼンテーション自体は伝えたい事を伝えられたと思う。また香港大の学生から「So, unique!」とコメントをもらい、質問の内容から反応は良かったと思う。しかし、質疑応答において英語力の乏しさを感じさせられた。

収穫としては、語学についての改善の余地はあるものの海外において、自分達のアイデア、ビジネスプランを伝える事、またそれに対して少なからずの自信と可能性を経験出来たことである。「ローカルに生活する私達がグローバルにビジネスをするには具体的にどんなアプローチをすれば良いのか?」そのエッセンスを感じ取れたことと共に、具体的なアクションとして、来年タマサートやシンガポール大の MBA で実施されているビジネスプランコンテストにエントリーする計画を数名の有志と立てている。

最後にこのような機会を与えてくれた関係者の方々、プレゼンメンバーである寺崎、磯貝両氏に感謝の念を述べたい。

以 上

今回の ICABE の視察先である香港は初めて訪れる場所だった。香港はアジアの金融センターと流通拠点であることは知っていたが、実際に香港の林立する高層ビルと山積みになされたコンテナの規模を目にすると、香港が果たしている役割の大きさに圧倒されるとともに、正直に言って、日本が世界に取り残されていっているような不安にも駆られた。

香港のスーパーに行くと、日本の農産物が数多く並んでいた。香港の第1次産業の割合は0.1%で農産物は専ら輸入に頼っており、割高にもかかわらず、日本の農産物が海外で取り扱われていることに驚かされたが、そこには、今後の日本の農業のヒントがあるように思われた。また、レストランについても日本食だけでなく世界各国のレストランがあり、良いものは国籍を問わず受け入れる香港の開放的な姿勢が感じられた。

しかし、今回の研修で何より印象的だったのは、東莞友池の工場見学をした深セン視察だった。修学旅行のような軽い気持ちで深センコースを選んだのだが、香港と深センを内と外から眺められ、中国が持つ複雑さの一端を垣間見ることができた。深センはもともと人口5万人程度の農村だったが、中国全土から仕事を求めて若者が賃金の高い深センに押し寄せ、現在では1,400万人にまで人口が膨れ上がり、平均年齢は28歳で女性が人口の7割を占めており、同じ地域で、少子高齢化を迎える香港とは人口構成の性質が異なっていた。世界の工場と言われている中国の中でも、深センは工場が多いため、雇用が多く、賃金も高いらしい。かつて日本を支えてきた「ものづくり」の多くが中国に移り、今回の訪問先も日本企業の出資による合併会社だった。移動中に多くの日系企業の工場を目の当たりにして、日本国内の製造業の空洞化が現実のものとして感じられた。

中国の工場労働者の定着率は低く、よい労働条件を求めて転職し、場合によっては隣の工場に移ることさえあり、お金が貯まれば故郷へ帰ってしまうそうだ。話では、労働者が食事代を負担する工場では、仕事に倒れる人が出るらしく、その理由は、多くのお金を得るために、自分の食事代を節約して食事を摂らないそうで、同様な理由で、収入が増えるならば休日勤務や残業も厭わないそうだ。今回の工場見学は土曜で、見学のために工場の一部を稼働させたそうだが、労働者にとっては、迷惑な話ではなかったらしい。

しかし、中国人にとって必ずしもお金が全てという訳ではなく、労働者のクラスでモチベーションを見るべきだとの話だった。出稼ぎの人はお金で、上のクラスの人はキャリアアップらしい。ただ、共通していることは、モチベーションは高く、日本ではかっこわるいと思うようなことでさえも、自分にプラスになると思えば、中国人は一生懸命頑張り、自分を成長させようとする意欲は高いそうだ。その話を伺い、私自身も、現状に満足することなく更に成長するために頑張っていかなければならないと再認識することができた。

最後に今回の ICABE では、多くの方々のご支援、ご協力のおかげで貴重な体験をさせていただき、改めて皆様に感謝を申し上げます。ICABEを通じて、国内外の様々なバックグラウンドを持つ方々と一緒に短時間ではあったものの、同じテーマについて議論することで、身近な問題からも新たな発見があり、日常では得難い貴重な経験となった。この ICABE での経験が今後の自分の糧となり、更なる成長を遂げられるものと確信しています。 以上

参加感想(12)

報告者：産業マネジメント専攻1年 浜崎 孝宏

日本の1970年代を彷彿(ほうふつ)させる情景がそこにはあった。「世界の工場」と呼ばれる中国内で、その代表格とも言える深圳(しんせん)を訪れた。道路は、戦車4台が横並びできそうに広々として整備され、その両サイドには大きな工場をあちこちに見ることができる。といっても、工場一色というわけではない。畑で農作業にいそむ人も多数見られ、緑も豊富。簡単に言えば、未開の田舎町に工場を強引にはめ込んだといった印象の街だ。一番驚いたのは深圳の平均年齢は25歳前後だったことだ。

08年の特許数で世界NO1に輝いたIT産業の雄・華為(ホアウェイ)も深圳にある。瓦を地上に垂直に立てたかのように、斜めにカーブした建物は、その「全身」がガラス張り。目測で高さ40~50メートルはあろうかと思わるド派手な建物だった。高速沿いにある華為だが、同社の出入り口付近にある緑の高速標識看板を「華為」と明記させるほど、その存在感は際立っていた。

閑話休題。

訪問先は、日本から進出し、05年8月に設立された東莞友池精密機械有限公司。シャープなどの要請を受けて、工場設立に至った様子だが、テレビの液晶パネル、携帯などに使用されるバックライトユニットの組立、絶縁シートプレス加工などが主な事業内容だ。生産された製品は、シャープの携帯、任天堂DS、キャノンのデジカメ、中国向けソニーエリクソン携帯の1パーツを担っている。資本金は300万USドル。スタッフは800人(女性が85パーセント、男性15パーセント、そのうち日本人7人)という陣容である。06年にはISO9001、同14001を取得している。

特に面白かったのは、人材確保についての話だ。関係者は「この近くにある会社ですが、10万人リストラしたのですが、リストラしすぎて、5万人雇用しなおした」、「日本では、不況で深刻みたいな感じですが、ここではすぐに人を集めようとしても集まらないんじゃないかな。リストラもあるが、採用するところでは、採用したりと、需要はあるのです」。話のスケールも、なぜか？さすが中国??と思わせる想定外のエピソードだった。

賃金面について。中国沿岸部の広州ホンダなどで働くスタッフは月額1万円4,5千円前後だったと記憶しているが、訪れた「友池」では残業込みで月額2000~2400元(1元14円換算で2万8000円~3万3600円)で、倍にあたる。「日本系の企業はこのぐらい出しているのではないか」(関係者)とのことで必ずしも賃金が高すぎるほどでもないようだ。「最近の中国の人は、大好きな携帯でお互いの待遇を情報交換し、いいほうへ移っていくこともよくある」(関係者)という。もちろん、係長クラスのポストを与え、指導的な役割を担う中国人スタッフは辞めないそうだが…。要するに給与が高騰しているという現実を講義

の中では耳にしたが、現地で聞くとより実感がわく。

スタッフも1年に1000人が入れ替わるそうで、熟練工となっても1年後には、スタッフがニューフェイスとなるため、一から仕事を教えていかねばならないのも気苦労という話だ。常にスタッフを1000人キープするように心がけており、学校などに絶えず、人材募集しているようだ。1部屋12人が住み、喧嘩が起これば部屋の年長者がその喧嘩の仲裁に入り、諫める。部屋の年長者(部屋長)には、言うことを聞かない者に対し、退寮の権限まで与えられており、統制されている。日本でもよく紹介される話だが、旧正月の時期にはボーナスを前後に分けて支給しないと人が帰ってこないケースもあるそうだ。

そればかりではない。レクレーションなど行わないと人がポーンといなくなったりするそうだ。イベントは、食堂にXマスツリーを飾ったり、旧正月には帰省するスタッフ全員にみかんやお菓子をもちせたり、通常の食事でもデザートや果物を提供したりと気を配っているそうだ。「食事のとき果物が出るのはうちだけだ」と関係者は胸を張った。新年会では、日本人の工場長が、スタッフ1人1人に酒をついで回り、「返杯も800~900杯になる」(関係者)。これまた中国のスケールの大きさ?を示す話だった。

人件費が安いと言われた中国の工場では、すでにスタッフの給与が、月給30000円前後のレベルまで上がってきていること。人の入れ替えが激しく過ぎて製品の質が安定しないことに苦心していた。人材確保&教育&統制などについて、学ぶことができたこともプラスとなったが、何よりも、ちょっぴり危なそうなおいのする深圳の街に足を踏み入れることができ、あらゆる物事を体感できたことが、自分にとっては一番の収穫だった。

以 上

参加感想(13)

報告者：産業マネジメント専攻1年 三浦 智穂

ICABE の参加は、前回のタイに引き続き 2 度目である。

今回の ICABE は、後期授業選択科目であるアジア財務戦略（福岡銀行寄付講座）のツアーを兼ねており、香港大学とのセッション以外に、学生主導で様々なツアーが企画された。2 日目および 3 日目のオプションツアーにご尽力いただいた浦上氏、鄭氏に心より感謝するとともに、QBS 学生が本気で力をあわせたら出来ないことは無いのではないかと思うほど、QBS 学生の人脈の広さに驚きと喜びを感じている。

前回に引き続き、今回も、海外ビジネススクール（BS）の学生のレベルの高さを思い知り、自分の不甲斐無さを感じる事となった。3 日目に訪問した香港科学技術大学は、世界 BS ランキング上位 20 以内に入るといふ、大変優秀な大学院であり、提携している BS は 50 を超えるといふ。語学力はもちろん、将来のビジョンの明確さ、人を惹きつけるユーモアや、余裕と自信を感じさせる語り口は、一緒に仕事をしてみたいと思わせる雰囲気を見せており、リーダーという言葉を想起させる学生ばかりだった。

私にとって今回の ICABE の主な目的は、世界的金融危機により日本と同様に大きな打撃を受けているはずの香港経済について、現状を肌で感じてくることであつたが、香港では、不景気など感じさせないほどの人々の熱気に驚いた。高級食材を販売するショッピングセンターやブランド店をいくつか見て回つたが、どこもかしこも人々。

実態経済の悪化による購買意欲の減少という後ろ向きな雰囲気を感じることは一切なく、人々の熱気に囲まれているうちに、明るい消費意欲が自然とわいてくるのが不思議だった。世界同時不況といふけれど、消費行動に与える影響度は国・地域によってこれほど違っているものなのかと、国民性・地域性と経済・消費行動の不思議を感じた。“アメリカの過剰消費とその減退”といふ最近よく耳にするキーワードも、実際にアメリカで暮らしてみないと、それがアメリカ市場や消費者に与えるインパクトとしてどの程度大きいものであるのか、正直リアルに感じる事が出来ていない。そういう意味で今回、100 年に一度といわれる世界的金融危機の最中に、他国の経済を垣間見ることができたのは、非常に良い経験になった。

以上

参加感想(14)

報告者：産業マネジメント専攻1年 米川 真

初めて ICABE に参加して、観光とは違う貴重な経験が出来た。特に重要な経験は、香港と深センの2ヶ所で企業訪問を行った事である。訪問を通して、私が学習・経験した事を紹介したい。

香港では JETRO と HKTDC (香港貿易発展局)、新光証券の3社を訪問。話の中で、香港への旅行者は、全体の半数以上が中国本土からであり、香港の品物に関する安心感と流行服等を購入する為にやってくるとの事だった。

また開放的かつ低税率な制度が、諸外国の企業が進出しやすい環境を整えており、香港は個人のみならず、企業においても魅力的な場所であると感じた。

深センでは、東莞友池精密機械有限公司を訪問。事業内容はバックライト組立・絶縁シート加工販売であるが、雇用状況の違いに驚いた。

3年以内の離職率はほぼ100%に近いそうで、旧正月で帰省後会社に戻ってこない人は毎年2割程度いるとの事だった。その為企業側の問題点としては、雇用の不安定と安定する為の高賃金(コストアップ)を挙げていた。

香港は『ショッピング目的』、深センは『就労目的』と人が集中する目的が違う事、また企業の中国進出=コストカットという安易なイメージがあったが、実際は雇用リスクやコストアップの逆ザヤの問題を抱えている事も分かった。

日系企業が中国へ進出する際、その土地の文化・環境・言語・法令・雇用等様々な視点で考える必要があると現地に行った事で体感出来た。

その為の情報提供は不可欠であり、現地にある日系金融機関の役割・必要性は大きいと感じた。

香港のグローバル化も、今回の訪問を通じて実感した。繁華街には欧米人や東南アジア等様々な国の人が入り混じり、会話で英語が飛び交っている。島国で閉鎖的な日本ではグローバル化のスピードを感じないが、香港では確実に進んでいる。

企業訪問の中でも、海外企業が香港進出しやすい理由の一つは、言語(英語)であるという話があった。

現状が続くと、日本は諸外国に取り残され立地同様、経済的にもアジアの辺境になると危機感を感じた。同時に、私自身も英語力改善に早急に取り組まなければならないと強く思った。

最後に、一つ印象に残った事を述べたい。3日目の深センの東莞友池精密機械有限公司訪問時、以下の話があった。「深センは高賃金である為、中国全土から若者が集まってくる。彼らの目的は、稼いだお金を家族へ仕送りするためです」。中国人は家族想いであり、両親・

兄弟を支える為に一生懸命働いているとの事。日本は豊かであるゆえに失われつつある家族への思いやり、そういった気持ちを持って彼らは工場で働いているのである。家族への思いを再認識させられた。

以上のように今回の企業訪問は、経済やビジネス等を学び、自身の視野の拡大につながった。全体を通して、有意義なプログラムだったと考える。

以 上

参加感想(15)

報告者：産業マネジメント専攻2年 江上 直人

今回の ICABE で香港、深セン及び東莞を訪問できたことは、私自身初めてこれらの地域を訪問したということもあり、これまでの QBS の授業や文献から学んだことを実際に体感するができた非常に有意義な経験となった。

JETOR では日本側から見た香港、反対に HKTDC では香港を売り込む側からと異なった視点から捉えた香港についてのレクチャーを受けることで香港の強み等を学ぶことができ大変興味深かった。それを受け香港は今後とも独立性の高く弾力性のある経済や、恵まれた立地及び英語が通じる人材面等を背景とする独自の強みから、外国企業が中国、特に珠江デルタ地域に進出する際のヘッドオフィスを構える拠点として十分機能し、さらに中立性や公平性の観点から上海等中国本土の大都市にはない強みとして、国際仲裁センターの存在も挙げられると考えるようになった。

新光証券を訪問した際には、JETOR や HKTDC ではあまり聞くことができなかった金融面での話が興味深かった。現在の香港市場は中国企業の外貨での資金調達市場として十分機能していることや、日系の金融機関にとってアジアを見据えた拠点としてのプレゼンスの高さ等を確認することができた。

深センでは香港とは違った人や街の勢いを体感でき、東莞では一つ一つの工場の大きさに驚き、これらの地域が製造業の一大拠点となっていることを再認識した。

香港を訪問する前は、中長期的には香港が中国化していくのではないかと少なからず考えていた。しかし、今回の訪問で中国本土にはない香港の強みを確認でき、一国二制度の終了後までのことは分からないが、当面の間はこれまで通り国際金融センターとしてのポジションは変わることが無いのではないかと考えるようになった。さらに現在最も勢いのある地域の一つである深センや東莞で中国のダイナミズムも体感することもでき、今回の ICABE は私自身にとって非常に有意義な経験となった。

以 上

参加感想(16)

報告者：産業マネジメント専攻2年 小栗 康生

今回の訪問は、私にとって初めての香港であり、また初めてのアジア訪問でもあった。今回私は、I C A B Eではなく丹羽先生の「アジア財務戦略」から参加したため、香港大学の学生との交流は行わなかったが、ジェットロ香港や香港貿易発展局(HKTD C)訪問、シンセンの企業訪問などを通じて、香港や華南地区の経済の現状を実際に見て、感じる事ができ、大変有意義であった。以下に、今回の訪問で特に感じたことを3点あげたい。

その一つは、香港経済は中国政府の優遇措置に支えられている面が大きい、という点である。無関税の貿易、低い所得税率といった政策に加え、中国からの旅行の自由化など、中国政府の大きな後押しもあって高い成長を実現しているという。また、香港は中国の貿易における重要なハブ機能としての役割を担っているとのことであった。その意味で、今後の香港の発展は中国のサポートなしには考えにくく、また香港の発展が中国経済へもプラスをもたらすという、相乗効果があると感じた。

2点目は、国際金融拠点としての香港である。香港証券取引所の時価総額は、アジアでは3位、世界でも7位の規模を誇っているという。また中国と異なり、資本移動も自由に行えるため香港を拠点に中国へ向けたビジネス展開を行うことも多く、アジアにおける重要な資金調達、金融拠点の一つとなっている。アジアの金融拠点といえばシンガポールと思っていたが、香港も中国進出の拠点として重要な役割を担っていることを知った。

3点目は、中国における経済成長の実態やモノづくりの現場を見ることができた点である。今回は、香港だけではなく中国のシンセンも訪問した。実際に訪問してみて、都市の規模の大きさに驚いた。華南地域は中国の中でも経済成長率が高く所属水準も高いと聞いていたが、シンセンはまさにその通りに感じられる都市であった。

さらに東莞友池精密機器を訪問し、中国における製造業の実態を見ることができた。同社では、中国全土から集まった約800人の労働者が働いているとのことであったが、お話を伺うにつれ、改めて中国における農村と都市部の所得格差の大きさを実感した。

最後に、今回のこの貴重な経験をさせていただいた、大学を始めとする関係者の皆さまと、今回のプログラムを企画・運営していただいた先生および6期の担当の方に、心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

以 上

参加感想(17)

報告者：産業マネジメント専攻2年 加藤 雅子

今回、全4日の日程で ICABE 香港・アジア財務戦略課外講義に参加させていただいた。

最も印象的であったのは、香港の方々が非常に親日的であったことである。町のあらゆるところで日本語を目にした。最初は、目につく日本語の多さばかりを意識していたが、実際は日本語だけでなく、世界各国の言葉が入り乱れている都市であった。香港はその歴史的背景から多様性を受け入れ、活かす土壌が整っている証拠であると思った。

まず、2日目の香港大学との交流プログラムでは、香港大学の学生からのプレゼンテーションが行われた。日本の大学から来た私たちのためのプレゼンテーションであったためかもしれないが、プレゼンテーションからは、香港と日本の強い結びつきの理解が深まった。香港の人々が想像以上に親日的であり、日本の製品だけでなく日本の文化や食べ物への関心が強いことが印象的だった。特にリテールマーケティングでは、日本で行っているさまざまなやり方を取り入れることにより、売上を伸ばすなど、よりよい方法を求め柔軟に対応していることが見受けられた。

私たちのチームは、国際金融センターとしての香港についてのプレゼンテーションを行ったが、私たちのプレゼンテーションへも率直かつ建設的な意見をいただき、香港の今後を考える上での参考になった。

また、香港大学・香港科学技術大学両校ともにマジョリティを作らないことを意識しているとのことであり、学生のバックボーンが偏らないようにしているとのことだった。まさに、香港滞在中に感じた多様性を受け入れる土壌は、大学院の学生の構成も戦略的に行うことでも成り立っていることが分かった。学生一人ひとりがマイノリティの意識を持つことなく、のびのびと、学生自身の民族や文化的背景だけでなく個性を発揮することができる場所であり、且つ、地球上の様々な民族や文化をお互いに知り、刺激を与えつつ、世界中で活躍することのできるビジネスパーソンとしてのスキルを、経営学と同時に学ぶことができているようだった。

香港科学技術大学のジャパンプラブのメンバーは、さらにその中でも日本に興味を持ってきており、日本企業特有の企業文化や組織風土のことについて様々なディスカッションを行った。彼らは、グローバルな視点でビジネスをとらえており、日本企業で今後働きたいという意志を持っているのではなく、卒業後、さまざまな国で、さまざまな国とビジネスを行う上で、特異な制度を持っている日本企業との関連をもつ時のために、日本企業について知ろうとしているようだった。

世界のビジネスリーダーとなるであろう彼らから、高い関心を寄せられているという事実を知ることと、日本企業の強さを改めて感じた。また、彼らとコミュニケーションをとることで、日本企業で、それも1社でしか働いたことのない私にとって、日本企業の企業文化や組織風土がグローバルな視点で見た場合に、特異であるということを書面の上での理解だけではなく、生きたビジネスの現場での経験談や学生との話の中で感じるものが

でき、貴重な経験となった。

今回の経験を、今後の私自身のビジネスの現場でいかしていきたい。

以 上

参加感想(18)

報告者：産業マネジメント専攻2年 鎌田幸治

初めての香港訪問であったが、深圳の工場視察、企業訪問等、実体経済が学べる貴重な機会であった。また、香港の認識も大きく変わった。

香港は不思議な都市である。日本人の感覚からは決して暮らしやすいとは思えないが、人が集まって来ている。すべて輸入に頼り、住居費も高く、関税がかからないとはいえ物価は高い。生活環境も坂が多く、公園が少なく、曇りがち(春先)であり、日本人から見れば、快適とは言えない。生活費も高いため、共働きが必要で、子育てには向いていなく、少子高齢化が進んでいる。但し、交通インフラは、電車・バス・タクシーともに安くて充実している。

このような環境であるにも関わらず、香港は中国からの流入により人口が増えている。また、香港生まれの方は、香港人という表現をしており、香港への愛着を感じる。その理由としては、治安がよい 仕事がある 交通インフラ含めて都市としての機能が充実している 北京語も英語も通じる 等が考えられる。アジアにおいては、治安がよく、交通インフラが整い、都市機能を持っている都市は、まだまだ限られていることが実感できた。

香港におけるブランドの購買力にも驚いた。中国からの富裕層によるものと思われるが、ルイヴィトンでも10席程度のレジカウンターすべてに顧客が並んでおり、スーパーみたいな光景であった。関税がかからないとはいえ、高級品であり安易には買いにくい、香港の品物は本物であるという安心感が顧客を呼び込んでいるとともに、中国富裕層の購買パワーを実感できた。

香港の政策もはっきりして参考になった。大きな空港や港を作り、交通インフラを整備し、関税をかけず、治安をよくして外資や観光客を呼び込む。公共交通機関は安くして、人の動きをよくしているが、賃料や食費は高い。政策次第で都市が作られ、人が集まってくる。工業、農業等の保護する産業が少ないため思い切った政策ができており、メリットを感じる人々が世界中から投資している。中国に頼りながらも、中国とは一線を引いた差別化を行っている。訪問したHKDCのスタッフは、役職者含めて女性が多く、日本以上に女性が活躍しており、見習うべき点も多い。

深圳も多大なエネルギーを感じる驚きの都市であった。香港から出国し、深圳に入った際に、ガイドさんが言った「自由の国へようこそ」の言葉が印象的であった。治安が悪く、模造品や違法品がどうどうと販売されているが、これからの発展性を感じさせる都市であった。

おかげさまで充実した4日間が過ぎせ、福岡銀行及び関係者に大変感謝しています。

以上

私は中国の出身で、香港へは初めての訪問である。最近北京、上海といった都市は日本からの訪問者多くなったが、昔から香港はアジアではかなり魅力的な都市であろう。

香港は1997年の7月1日にイギリスから中国に返還されました。私は、返還のその日のことをはっきりと今でも覚えています。返還のその日の午前0時ちょうどに、香港と中国の国境から、中国陸軍の軍隊が列をなして、香港内に入ってきました。といっても、それを生でみたわけではなく、テレビで見ました。その時、なるほど国の主権が変わるといことは、軍隊が変わることなのだとはっきり認識しました。

もともと中国の領土だった香港がなぜイギリス領になったのか。簡単に言えば、アヘン戦争(1840-42)で当時の中国の清朝が敗れ、南京条約で香港をイギリスに割譲することになったからでした。

通常「香港」と言う場合、九龍、香港島、新界の3つに分かれる地域の総称を指しますが、南京条約で割譲されたのはこのうち「香港島」のことであり、その対岸の九龍半島は含まれていませんでした。現在の九龍市街は1860年の天津条約で割譲され、また新界(九龍半島の大部分)は1898年に「租借」されています。「租借」とは期限付きで領土を割譲することで、この時には99年間という期限がつけられました。つまり、1997年の返還というのは、これに由来するわけで、この際、香港島と九龍市街も一括して返還されることになりました。その地を訪問できるチャンスを得られたことは非常に感慨深いものであった。

3月中旬過ぎの訪問であって、現地の気温は21度だが、夜はまだ寒さを感じる時期である。台湾経由で新空港に降り立った。新空港へはJTBから迎えの方が見えられ、車でホテルへ移動となった。ホテルへ向かう途中、道路の両サイドは見渡す限りの高層ビルが広がり、その高さに驚かされた。あまりにも日本とスケールが違うと感じ入った。街へ近づくにつれ建設中の建物が目に付き、古い家屋と大きく近代的な建物とがあまりに対照的であった。

ホテルは清潔で設備はまずまずである。その後、歓迎の宴が催されたが、非常に温かく迎え入れられ料理も素晴らしいものであった。

東莞への企業訪問では、日本企業からみた中国市場の長所、短所について説明を受けた。その中で、中国の大きな問題点として、現在の経済発展に中国企業の関与が薄く、外資系企業の生産中継地点としかなく、今後の発展を遂げるためには、中国企業が中国国内向けの活動を活発化させる必要があると感じた。

今回の中国訪問により、自分自身の視野を広くすることが出来たと思う。中国が今後の世界経済を牽引する存在となりえることを実感できた。また、参加者皆が協力して各プログラムに取り組むことができ、大変意義深いものであったと思う。今回、このような場を提供していただいたことに感謝するものである。

以上

参加感想(20)

報告者：産業マネジメント専攻2年 高木 恭一

今回、「アジア財務戦略」の講義を通して、香港、中国(深圳、東莞)を訪問し、さまざまな貴重な経験をする事ができたのは、大学をはじめ、先生、事前準備に努力いただいたメンバーの皆さんのおかげであり、改めて深く感謝します。

まず、香港。

今や、アジアの金融の中心とも言える香港は、想像を超える街であった。金融の街に相応しい高層ビルが数多く建っているのはもちろん、街中のマンションやビルも細くて高いといったものがひしめき合って建っており、人口密集のすごさを納得することができた。

また、いろいろな話を聞く中で、まだまだ環境を意識していないところであると聞いたが、建物の古い町並みでもゴミひとつ落ちていなかったことには素直に感心した。ただ、滞在中、ずっとスモッグのようなものがかかっており、これから環境への取組みは重要になってくるのではないかと感じた。

治安は良く、税制面でのメリットを考えると、企業として新規に中国に進出する場合の香港の優位性を強く感じた。

そして、深圳、東莞。

深圳は10年ほどから特区となり開発が進んだと記憶しているが、実際に行って歩いてみると、確かに都会の町並みではあるもの、6期の鄭さんやガイドから事前に脅かされていたせいか、とても怖い印象であった。地元のガイドも歩いているときにバッグをしっかりと抱きしめており、余計にそう思えた。

東莞は工業団地的な雰囲気、出稼ぎの人々が数多い町だということがすぐにわかるころであった。余談だが、私はコカ・コーラに勤めているが、この街にはペプシしかなかったことが気になった。

全体を通して。

何となく香港や中国は自転車という印象があったが、全く走ってなかった。特に香港は車が多く、いつも渋滞という感じであった。タクシー(的士)も多く、しかも料金は日本よりはるかに安かった。

また、夜の食事において、日頃接することのない6期の皆さんや、2年次になってから会うことも少なくなった同期のメンバーといろいろな話が出来たことも貴重な経験となった。

今回の経験を、何らかの形で今後の自己成長に活かしたい。

以 上

参加感想(21)

報告者：産業マネジメント専攻2年 高橋 利幸

空港に降りたら汗が出てきた。福岡の寒さとの違いに、外国に到着した実感がすぐにわいてきた。街を歩いてみると、人の多さで熱気が伝わり、香港のパワーを肌で感じた。物価は日本よりも高いぐらいで、韓国ウォンが急落しているイメージを香港にも抱いていた私は、duty freeの国として買い物もひそかに楽しみにしていたので残念な驚きだった。

今回のスタディ・ツアーで一番印象に残っているのは、3日目に訪れた、香港科技大のビジネススクール生との交流である。彼らは、世界17位、EMBAでは世界1位のビジネススクールとしての「誇り」を持っていた。校舎は新しくきれいで、ビジネススクール専用ルームに入るとすぐに、その「世界17位のビジネススクール」と大きく壁に書かれていた。我がQBSもこのアピールの仕方は見習うべきだと感じた。香港科技大の学生は世界中から集まっていて、中国でのビジネスの可能性を探っていた。また日本についても、「日本のビジネススクールの特徴、どのビジネススクールが人気か」など多くの質問がきた。世界の若者が世界中でのビジネスの可能性を探っている。日本だけを見ている自分にとってとても刺激となった。ただ昼食をはさんでの彼らとの会話は、同じ若者として、「若者トーク」で楽しいものとなった。

私は、昨年の中国北京でのICABEにも参加したので、今回で2度目の参加となる。今回は、「アジアビジネス財務」との合同スタディ・ツアーだったので、参加人数が多く、今まであまり交流したことのないメンバーと話すことができた。また先生方ともゆっくり話を聞くことができた。やはり寝食を共にすることで、仲が深まる。この親交は続けていきたい。ただ人数が多い分、スケジュール管理など他人任せとなり、また私は交流大学とのプレゼンがなかったので香港に対して勉強不足だった反省点もある。

香港は夜の街でもあった。繁華街に行くと、外国人ビジネスマン、観光客でひしめきあい、「ここはヨーロッパのどこかの国か」と錯覚した。外国人の数は夜が更けるとさらに増え、夜中の1時ごろは道も歩けないほどの混雑ぶりだった。私は世界50カ国ほどを旅したが、これほどまでに熱気に溢れ、国際色豊かな街は見たことがない。また、以前ヨーロッパで留学していた時の仲間にも会うことができ、香港が国際都市であることを肌で実感した。将来、香港にビジネスとして戻ってきたい。

以上

1、今回の研修での訪問先は次の通りである。

- ・ JETRO 香港
- ・ 香港大学 (プレゼンテーション) / 新光証券
- ・ 深セン 東莞友池精密機械有限公司

2、上記の政府機関、大学、企業を訪問して特に印象深かったことや以下にあげる。

1)「JETRO 香港」

香港富裕層の厚みについてジェットロの方が触れておられたが、日本と比較すると、香港では流動資産総額が100万ドルを超える富裕層8万7千人に対して、日本では100万ドル(約1億1,600万円)以上の金融資産を持つ富裕層は米国に次いで世界2位の147万人存在する(メリルリンチグループ「アジア太平洋ウェルス・レポート」)。このことからすると、日本の富裕層の方に圧倒的な厚みがあるように思えるのだが、香港の富裕層の方に厚みを感じさせるのは、香港では資産3千万ドルを超える富豪は1330人おり、アジア・太平洋の1.53%を占め、平均資産は一人当たり540万ドルで、アジア9つの国と地域中トップであることなどが原因と考えられる。つまり、平均的な富裕層が多い日本と図抜けた富裕層が香港にはいるということではないだろうか。このように対照的な富裕層群を持つ日本と香港の社会の消費動向は全く違う面を持つと思われる。

2)「香港大学プレゼンテーション」

香港大学でのプレゼンは大変良い勉強になった。理由は以下の三つである。プレゼンテーションでは一つのスライドに一つのメッセージで伝えること。説明文不要。このような学生交流では大胆な仮説をたてた方が、議論が進みやすい(「カンフーターマパーク」)。

帰納的な発想より演繹的な発想が重要。

私自身個人的には、帰納的な発想が強く、積み上げた事実から考える癖があるが、これだと大胆な仮説はたてられない。

3)「香港新光証券」

中国5兆元の公共投資は、1インフラ、2保健衛生、3土地改良の大きく三つに絞られていることが指摘されていた。インフラ整備は多くの無駄な工事を生む危険が新聞などで報道されている。しかし、今後中国が8%の成長を維持するためにも、内需拡大が重要であり、そのためには国民の消費の拡大が望まれるが、GDP比50%以上という貯蓄率を下げる必要がある。将来への不安が大きい国民を消費に向かわせるためにも、健康保険などの整備にこそ投資していくべきであろうと思う。

4) 東莞友池精密機械有限公司

当企業は香港に本部があり、シンガポール株式市場に上場している。香港で登記を行っているので、香港レッドチップ株に相当すると思われるが、シンガポールに上場している。シンガポール株式市場は香港で上場できなかった中国企業にも門戸を開いている。このことから、当企業は香港での上場がかなわず、シンガポールで上場したと思われる。香港とシンガポールの株式市場がライバル関係にあると思われるが、実際には中国本土を背後に抱えた香港の強さが際立ち始めたのではないだろうか。

3、まとめ

背後に巨大な中国本土を抱え、特異な「一国二制度」を維持し、金融政策を放棄しても為替の安定のために通貨政策ではカレンシーボード制をとる香港は今後も中国と世界をつなぐ役割においてますます重要になるとと思われる。

以 上

私は、I C A B E 香港の参加で学んだこととして、主に2点が印象に残った。よって、その2点から感想を述べ、最後にまとめを記載しようと思う。

香港への日本進出の事例（JETROによる香港の概況の資料から）

私が、香港への日本進出で驚いたことは日本の農産物は値段が高いが、ニーズがとても高く、多く市場に出回っているということである。特に、九州産の農産物が多いことは注目すべきことであると考えた。もちろん、課題はやはり値段の高さである。しかしながら近年、香港の健康に対する関心の強さが高まっているということで支持されているという情報を聞くことが出来たことは大変興味深いことであった。

他にも、JETROの中で、イチゴのあまおうは日本でも知られていることとして説明があったが、何より驚いたことは、サツマイモが現在ブームになっているということであった。その根拠として日本のサツマイモは甘く、香港では売られている形のまま食べる習慣ではなく、切ったものを口にする食習慣があるとのことであった。通常、日本では市場に出回らない形が悪い、または小さい形のサツマイモであっても甘く味がよければ受け入れられるという寛容さがそのブームを形作っているとのことである。これは、日本国内全体として閉塞感が漂っている第一次産業にとって可能性に満ちた出来事に見えた。

街の雰囲気

私は、初めて香港を訪れたが人数の多さに圧倒された。街は活況に包まれ勢いがあるように感じられた。観光客が多いのか、現地の人が多いのか判断がつかないくらいたくさんの種類の間人が街を行き来していた。しかしながら、ビジネス街において、近年のサブプライム問題の影響があることはテナントの空き室が出て来ているとの添乗員の言葉から、また実際に見てみることにより見て取れることが出来るように私は感じた。

今後、サブプライム問題の影響がさらに深刻になれば観光客の減少や、企業が香港から外へ出て行こうとするだろう。それをどう食い止めるか。注目すべきことと考える。

まとめ

私は、日本と比較しながら3泊4日の香港滞在の生活を過ごしてきた。ここで感じたことは、テレビ等のマスメディアによって閉塞感を感じず、外に出てもたくさんの人々の街の往来を見ることにより閉塞感が見られないということであった。これは、日本に住んでいると気がつかないことである。

悲観的な気持ちで生活を過ごすことも時には大切であるが、可能性を持ちながら生きていくことも大切なのではないかと考えるきっかけになったと私は考えた。

以上

参加報告(24)

報告者：修士課程1年 香月 佑太

まだ届いていません。